

明石の街を歩く。

本学創立者中部謙吉の父・中部幾次郎

本学創立者・中部謙吉の父、幾次郎（一八六六～一九四六）。幾次郎は大洋漁業（株）（現・株）マルハニチロホールディングス）の創業者で、日本の水産業界の発展に寄与。幾次郎が没した後、遺志を受け継いだ息子たちにより、野球チームを結成。そのチームは、「まるは球団」と称した。現在の「横浜ベイスターズ」の前身である。そんな興味深い幾次郎の生家、兵庫県明石市の街を歩いてきた。



① 明石公園前にある中部幾次郎の銅像。1928年に建立された幾次郎の銅像は、戦時中の金属回収に提供したため1951年に再建。

text & photography_YUTA SUEYOSHI, TOMOKAZU MURAKAMI



① 毎日眺めた海の近くの浜光明寺に眠る。



① 漁船の停泊。民家の近くにこんな光景。



① 魚の棚商店街。新鮮な魚で溢れ、地元の人で賑わう。

瀬戸内海に面した東西に細長いまち、明石。東経135度の子午線が通る明石は、日本標準時を刻む「時のまち」。言わずと知れた明石名物「明石焼き」は、玉子焼きとも呼ばれ、多くの人に親しまれている。

この街で名を残しているのは、本学創立者の父・中部幾次郎（なかべいくじろう）。幾次郎は幼い頃、家業の手伝いをする平凡な少年だった。しかし、家業の林兼（はやしかね）商店を継いでからは優れた商才を発揮。林兼商店は鮮魚仲買運搬業を行っていた。仕事のこととなると頑固な性格で、一度決めたことは最後までやり通した。また、細かいことまで調べあげるといふ研究熱心だったため、数々のことを考案した。例えば1890年代頃、明石の沖合いから大阪へ魚を運ぶには人力で15時間かかっていた。しかし、幾次郎は蒸気船で船を引っ張る曳船の方法を考案した。

さらに、人の才能を見る目もあれば、人を育てることも上手かった。従業員に対しても、漁のいろはからも指導した。幾次郎は漁業で有名とされるが、漁業に限らず漁船の建造のための中部鉄工場や、漁夫への米を調達するための農場を経営し、中部農事株式会社設立等、幅広い事業を展開。その一方、小学校の校舎を新設する際には、土地や資金を提供するなど公営事業にも貢献。明石に多くの寄与をした。このような功績から、明石には銅像があるのである。